『アバウト・タイム』リチャード・カーティス監督

何気ない時間にこそ幸せがある、それを感じながら最後を終えられたら。

(2014.09.25)

「ラブコメの帝王」の異名をとる名匠・リチャード・カーティス監督。最新作『アバウト・タイム～愛おしい時間について～』は、タイムトラベルの能力を持った青年の恋とそれをとりまく家族を描いた心温まるストーリー。カーティス監督は『Mr.ビーン』の生みの親とあって、楽しい笑いも満載。作品のモチーフ、コメディについて……。高野てるみさんによるインタビューです。

あの『Mr.ビーン』を生み出した
敏腕脚本家。

今年の夏に日本にもお目見えした待望の英国ミュージカル、『戦火の馬』。7年近くロングラン興行を続けたその舞台は、パペット製の馬が、本物の馬よりも馬らしく演じる奇跡と言っても良いくらいのもの。これに目をつけたスピルバーグ監督が、同名の映画を製作・監督したことは、記憶に新しいですが、その時に英国人脚本家として白羽の矢をたてられたのが、リチャード・カーティス監督でした。

そう、『Mr.ビーン』から始まって、『戦火の馬』でハリウッド進出に至るまで、リチャード・カーティス監督は、監督以前に、凄腕の脚本家なのです。『フォー・ウエディング』（94）、『ノッティングヒルの恋人』（99）、『ブリジット・ジョーンズの日記　きれそうなわたしの12か月』（04）など日本でもヒット作品となった映画は、彼の脚本の力の賜です。それだけでは飽き足らず、書いた脚本の監督を自ら手掛け、またまた、いくつも秀逸な作品を生み出しました。